令和 5 年度事業報告

（令和5年4月1日 ～ 令和6年3月31日）

認定特定非営利活動法人
みやぎ発達障害サポートネット

Ⅰ.年間の法人活動のまとめ

昨年 5 月に、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行してから、「3 年ぶりに」というイベントが開催され、街に賑わいが戻ってきたのと同じく、当法人においてもコロナ以前を取り戻すべく、子ども支援事業にて、しばらく控えていた活動を積極的に行った。それにより、当法人にも賑やかさが戻ってきた 1 年だった。特に、秋に行ったプリズムまつりでは、たくさんの子どもたちがお店を運営し、楽しむ様子を見られたことで、「当たり前の日常」が戻ってきたことを強く感じられた。

大人より子どもたちの方がいろいろなことを我慢してきた 3 年間だったので、これからまた子どもたちに、できなかったことや経験してこなかったことをどんどん取り戻していってほしいと願っている。

活動体としての事業は、日本郵便年賀寄付金助成配分事業に採択されたことにより、「発達障害のある子どもたちの個々の『つよみ』を生かした支援チームづくり」を 1 年間、実施した。子どもたちの『つよみ』を見いだすアセスメント、連携をテーマにしたカンファレンスの開催、指定相談支援事業所と連携した支援チームづくりなどの事業をしていく中で得られた成果と課題は、今後の法人活動の新たな礎になるものであった。

以下に、重点活動目標の 3 つの視点から検証をする。

【子ども支援事業の安定的な運営を図る】

児童発達支援事業の利用登録者数は、50 名の目標を達成したことで、前年度以上に安定的な運営を進めることができた。中でも、これまで 1 年、2 年と通って個別セッションでさまざまな経験をし、満を持して年長になり、小集団活動でイキイキと過ごしている子どもたちの姿を見られたことは、保護者だけでなく、私たち職員にとっても非常にうれしいことであった。

自主事業であるプリズムは、市内に約 200 か所の放課後等デイサービス事業所があるにもかかわらず、いまだ問い合わせが途切れない。特に、不登校のケースは年々増えており、それをカバーする社会資源の少なさを象徴していると感じる。近年の利用者数は、60～70 名を推移しており、児童発達支援事業からプリズムに移行するケースも多く、急激な利用者数減少が抑えられ、安定している。

【人材育成を図る】

現在は経験年数が 10 年以上の職員から 1 年未満の職員まで幅広く勤務している。中堅の職員が経験値を増やしていることと、日々のミーティングや打合せが機能し、足並みの揃った支援を提供

することができているのは、育成を進めてきたことでの成果と捉えている。その一方で、子ども支援事業全体の現在の支援方法や対応の仕方が本当に合っているのか、このままでよいのかを検証するために、専門家に外部評価を依頼し、2 月に実施した。その結果として、「今後の組織運営を考えた際には人材育成がキーワードになってくる」という助言をいただいた。法人としてのコアバリューを職員と共有する、どの職員も知識をもとに実践を重ねるなど細部に焦点を当てつつ、育成を図っていきたい。さらに、組織運営において、段階的に育成を捉えていくことには仕組みの上でまだ不十分さがあるので、次期の中期計画にも位置付けて、的確に進めていきたいと考える。

【計画的な資金確保と運用を図る】

収入の面においても子ども支援事業が安定的に運営してこられたことで、数年前と比較して資金運営面での不安や心配が減っている。その一方で、障害福祉サービスの報酬改定は、児童発達支援事業において、これまでとは違った運営を求められる部分もあるため、令和 3 年度からの 3 年間と次年度からの 3 年間が同じ結果や収入を生むとは考えにくい。子どもたちの最善の利益を念頭に置きつつ、制度変更に対応する柔軟さを持ち合わせながら資金確保と運用を考えていく必要がある。

1．子ども支援事業

令和 5 年度の実績：月別利用人数（表 1）

（人）

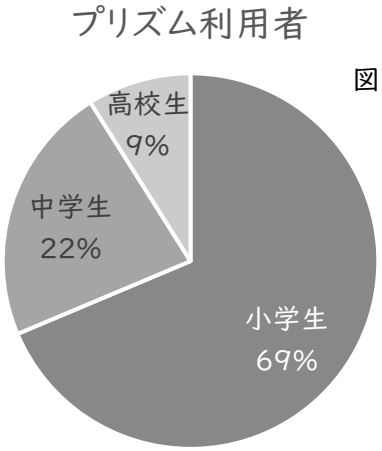
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
プリズム	126	91	124	129	96	89	128	102	123	119	107	90	1324
児童発達支援	120	121	122	129	116	126	141	144	145	154	155	162	1653

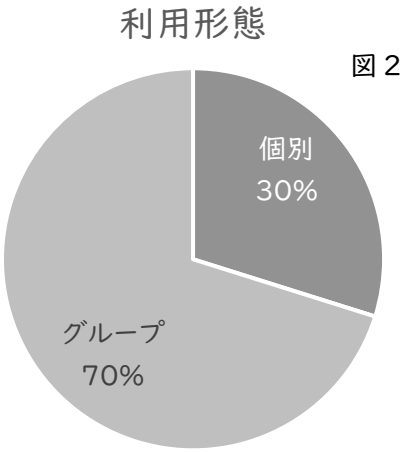
（1）発達支援事業プリズム（定款第５条（７）以外の定款第５条による）

令和 5 年は、利用者数 67 名、新規の利用者数は 17 名だった。新規の内訳は児童発達支援の卒業生の他、不登校・学校への行き渋りがあり、本人への療育的関わりを求めるケース、放課後等デイサービスの他にも本人の居場所として行ける場所を増やしたいケースなどが挙げられる。また、本人だけではなく、保護者が相談する場や、プリズム勉強会に参加したいから利用を決めたなど、保護者側のニーズも高いと感じている。

日本郵便年賀寄付金助成配分事業による、子どもたちの『つよみ』を見いだすアセスメントとして KABC-Ⅱや SP 感覚プロファイルを実施したところ、本人の強みや、考え方の傾向、感覚による行動の在り方などが見えてきた。中学生においては、その情報を基に、勉強の仕方、学校に行くリズムなどを保護者とだけではなく、本人とも話し合うことができたことは大きな成果だと考える。

利用者は小学生 69%、中学生 22%、高校生 9%となっている（図１）。支援形態は個別支援が 30%、グループ支援が 70%となっており、昨年と同じく個別支援のニーズが高かった（図２）。





① 個別のセッションにおいて

個別は、自分のしたい話をたくさんできる場所、本人に合った学習の取り組み方を考える、その子に合った表出方法を見出す、言葉や文字の学習、グループに入る前に大人との信頼関係を構築するためなど、その子によって取り組む内容がそれぞれ違う。その中で、グループに所属していた高校生が、最終年度はじっくり自分の特性を考える時間にしたいと個別を希望した。毎回、学校であった気になる友だちの発言、自分の将来のビジョン、もし障害者手帳をとった時のメリットとデメリットなど、本人のメモを基に話せる時間をとったところ、卒業する３月に「最後の年は、楽しいじゃなく、ためになる１年だった」と話していた。これからも、個々のニーズに合った場を大切にしていきたい。

② グループのセッションにおいて

グループは、４月には13グループあったが、10月に再編成を行い12グループとなり、子どもの実態に合わせて３～5 名で編成されている。コロナ禍も落ち着いたということで、調理の機会が増え、たこ焼きパーティーや肉巻きおにぎりなど、自分たちで話し合い、満足のいく活動をすることができた。また、3 年ぶりにプリズムまつりを行った。感染症予防から前回よりも規模を縮小したものの、小学生から高校生までグループの垣根を越えた一緒の活動は、年下の子に声を掛ける姿や、初めての友だちの中に入っていく姿、店員をすると大きな声で話せるなど、普段見せない新たな一面を見ることができた。

③ プリズム勉強会において

プリズム勉強会は 2 回開催した。12 月は、プリズム卒業生による「支援がない中で、自分なりに工夫してきたこと」をテーマに本人の体験談や今の気持ちを話した。2 月にプ

リズム主任の後藤が登壇し「その子の強みを生かしていく」をテーマに、個々の強みを生かしていく上での具体的な例を基に話をした。12 月はとても良かった 88.5%、よかった 11.5%、2 月はとても良かった 81.8%、良かった 18.2%と、おおむね好評だった。

④ サークル活動において

1 年を通して、毎月 5 ～7 名の参加者があった。活動は主に、カラオケ、ゲーム、外食となっている。固定メンバーと、クリスマス会や外食は参加するメンバーがいて、それぞれ余暇の場となっている。

⑤ ポーションにおいて

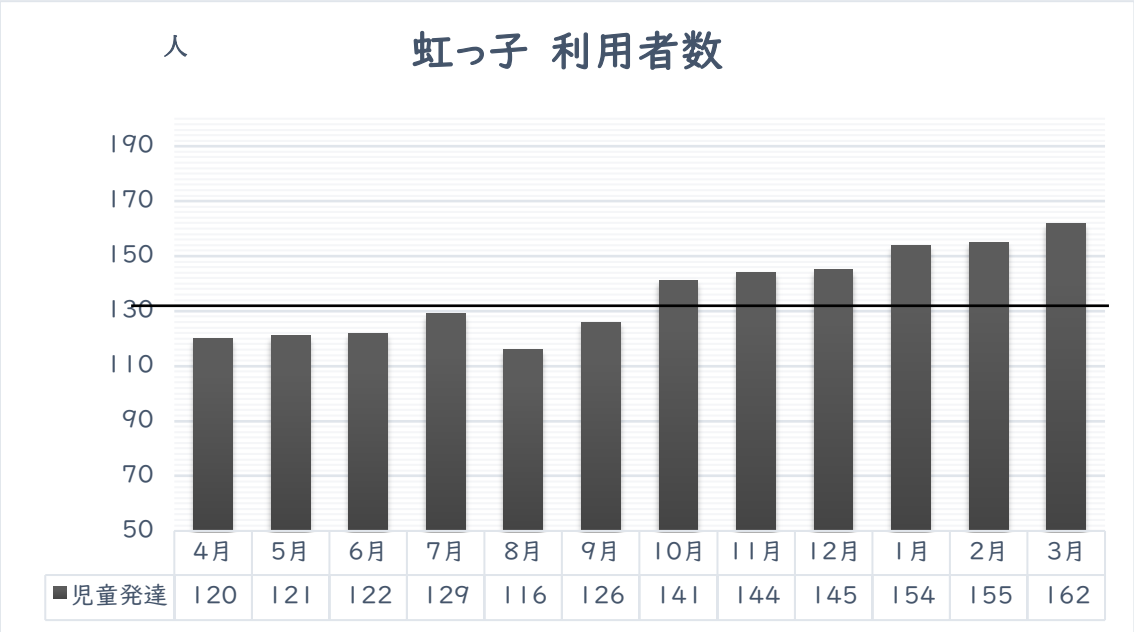
1 回毎に予約をして利用するプリズムポーションは、年間の総利用数が 12 回だった。これは昨年度よりも大幅に少なくなっているが、要因としてはプリズム待機者が少なかったこと、今までポーションを利用していた方が成人して会員相談に移行したことがあげられる。

利用目的としては「本人への特性の説明」「ICT 機器を使った学習への取り組み方」などの要望があり、「プリズム利用待機」ともなっている。

（2）ぬくもりすぺいす虹っ子（定款第 5 条（7）による）

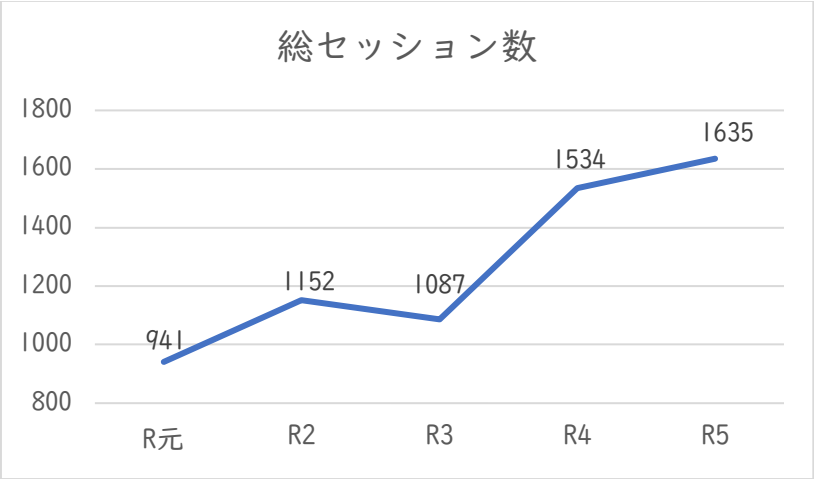
1）児童発達支援事業

令和 5 年度　利用者数のグラフ　　図 3



令和 5 年度は、事業計画に掲げた利用者 50 名という最大値の目標を達成することができた。令和 3 年度に児童発達支援に一本化したばかりの頃は、50 名という目標に達することができるのかどうか不安を抱いていたが、それを 3 年でクリアできたことは、私たち職員にとって誇りに思うことができる結果となった。

総セッション数　　図 4



人数の増加に伴い、年間の総セッション数は 1635 セッションとなり、前年度より約 100 セッションの増加となった。毎日、多くの子どもたちを受け入れ続けたことは、準備や記録に追われることも多かったが、その中で職員が互いに工夫を凝らしたり、知恵を出し合ったりと切磋琢磨するという変容が見られ、その結果、1 年間通してやり遂げたことは大きな自信につながった。

その一方で、主に未就学児を対象とするため、放課後等デイサービスと比較して利用する期間が短いことが、運営を左右するという弱点がある。5 年度は年長児が 33 名在籍していたが、3 月末で一気に終了したことで、新年度はまた少ない人数からのスタートとなる。サービスの質の確保に努めつつ、与えられた条件の中で揺るぎない運営をしていくことが、今後の課題と捉えている。

児童発達支援事業では、他に次のような成果が得られた。

① 個別のセッションにおいて

特徴的だったことは、下半期に入ってから年長児の利用者が増えたことだった。就学まで残り半年を切ったところからのスタートは、時間のなさから十分な支援ができたとは言いにくいが、保護者の意向を確認しながら進めることを重視した。

現場では、中堅の職員が子どもたちの成長していく過程について理解を深めていく中で、先を見越した支援をすることができるようになった。具体的には、小集団活動への移行を見据えている子どもに対し、集団で取り組む活動をあらかじめ個別セッシ

ョンで取り上げたことで、切り替え後の混乱を引き起こすことが少なくなった。

これからも職員が「個」で動くのではなく、全員で連動性を持った支援、一貫性のある支援ができるよう、意識して臨みたい。

② 小集団活動において

これまでで最多の 5 グループ（3～5 名）を結成し、それぞれのグループの子どもたちが自分らしさを発揮して活動していた。同じ活動をする場合でも、所属する子どもたちの実態に合わせて提示の仕方や手立てを変えることを意識し、実践を重ねた。ときに落ち着かない様子を見せる子どももいたが、ルールを当てはめるのではなく、子どもの気持ちやコンディションに歩み寄ることで、子どもたちは大きく気持ちを乱すことなく、集団での活動に戻っていくことができていた。

③ 保護者向けのイベント開催から

（表２）

開催月	イベント名	参加人数
5 月	就学準備の会	14 名
9～10 月 11 月～12 月	ペアレントプログラム（全６回）① ②	5 名 4 名
11 月	先輩ママに話を聞く会～特別支援学級編～	9 名
1 月	ミニ講座「笑顔で入学式を迎えるために」	9 名

昨年度と同様に、上記のイベントを開催した。平日の方が参加しやすい方、休日の方が参加しやすい方と両者が混在しているため、参加人数は多いとは言えないが、以前と比較すると増加しており、関心の高さがうかがえる。特にペアレントプログラムでは、６回の講座を通して、参加者が我が子の行動に対する見方や考え方が変わっていく様子が見られた。それにより、子どものよいところに目が向くようになったり、日々のかかわり方に工夫が見られたりという変容もあった。

今後も引き続き、ニーズに合わせたイベントを開催し、保護者の横のつながりを生み出すような取り組みを充実させていきたい。

２ 保護者等支援事業（定款第５条（７）以外の定款第５条による）

保護者等支援事業の参加人数 （表 3）

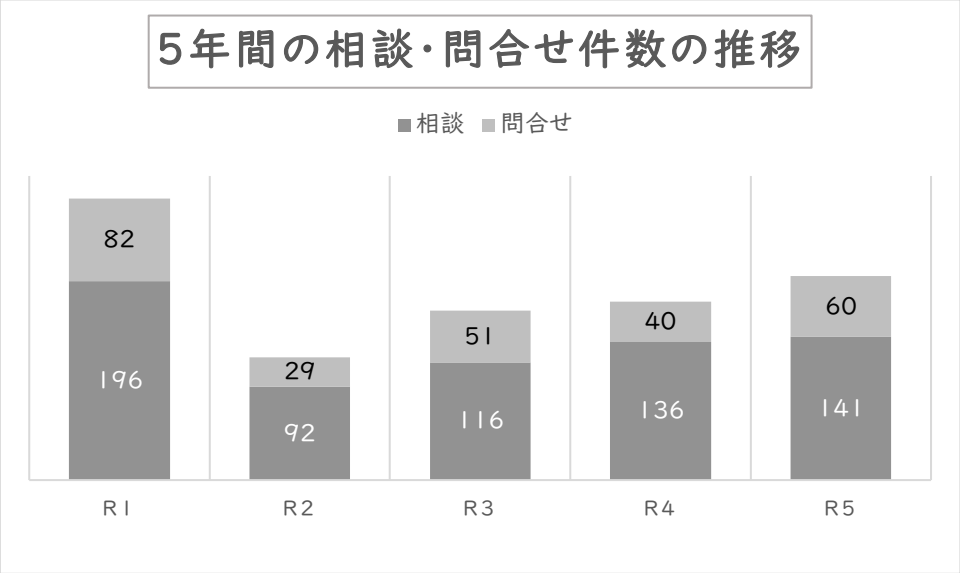
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計
相談支援	11	10	19	17	16	9	11	16	10	8	10	4	141
問合せ	3	2	4	5	8	3	5	6	7	6	8	3	60
学び合い				50				35					85
ふわり	6	5	5	3		4	5	0	3	3	0	2	36
ラルクママ	4	7	5	11	2	5	6	2	4	6	4	8	64
サロン合計	10	12	10	14	2	9	11	2	7	9	4	10	100

（１）相談事業

〇相談件数の総数は 141 件で、前年度とほぼ横ばいの推移だった。問合せ件数の総数は 60 件で、前年度の 35 件より 4 割ほど増加している。問合せの対象者の内訳は未就学児が過半数で、他機関からの紹介によるものが多かった。

直近 5 年間の相談件数と問合せ件数の推移を図〇に示した。新型コロナウイルス感染症発生前と比べると、相談件数は落ち込みが見られるが、それだけ相談できる機関が増えたり、利用できる場所が増えたりしたことの表れではないかと前向きにとらえている。法人の活動として、相談事業が大事な位置付けであることには変わりないが、宣伝して件数を増やすなどの取り組みをするのではなく、今後も地道に継続していきたい。

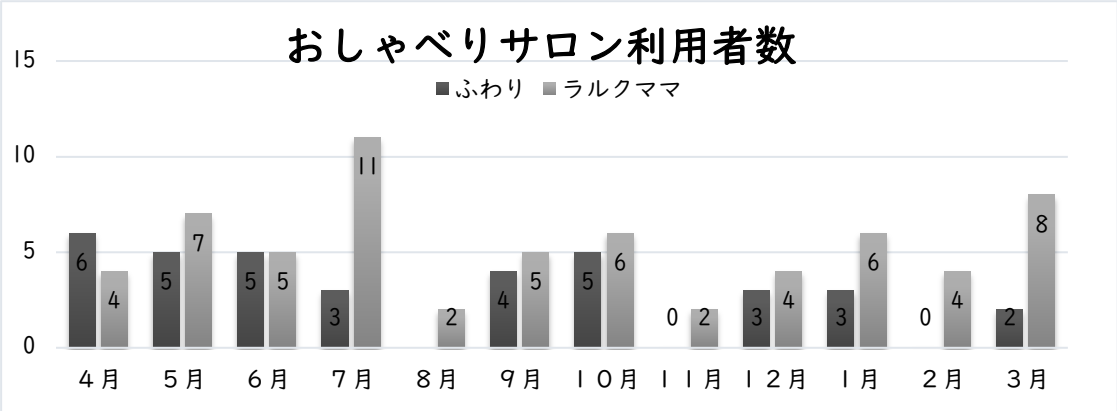
図 5



（2）おしゃべりサロン事業

おしゃべりサロンの年間利用者数は１００名で、幼児期から学齢期の保護者が参加する「ふわり」が３６名、中高校生から成人の保護者が参加する「ラルクママ」が６４名だった。「ふわり」は利用がない月があったが、「ラルクママ」は毎月一定数の参加があった。

図６



７月のラルクママのイベント「当事者のお話～プリズム卒業生～」は特に参加者が多く11 名だった。当事者の話は聞く機会が限られている上、一人一人の状況が異なるため開催に不安もあったが、イベント終了後のアンケートでは、『当事者の方がどんな思いで過ごしてきたかを聞けたことがとても大きかったです。また、他の方の体験談も交えてのお話もとても参考になりました。最後は少しホッとしたような気持ちになれました』という率直な感想が寄せられた。また、『苦手な事については、やらせてもムダなのかとあきらめていた部分があったが、「大人になっても成長する」と聞けて励まされた。様々な年代の特性のあるお子さんのお話を聞けて将来の困りごとなどをなんとなく知ることが出来たのもよかった』という感想から、当事者の話の後、参加者で我が子について話す時間を設けたおかげで、様々な年代の子どもの様子を知る機会をつくり、話を聞くだけでなく参加者で語り合う時間の大切さを実感した。

「ふわり」のテーマは、発達に心配を抱えている保護者や未診断だが日々の子育てに悩んでいる保護者に、参加してみようと思ってもらえるように具体的な設定を心掛けている。児童発達支援「虹っ子」や他の福祉サービスの利用につながると、サービス利用時に相談できる機会が増えるため、「ふわり」への参加者が少なくなる傾向にある。しかし、「ふわり」参加者に多い未就学児の保護者は、発達障害や療育についての情報があふれている今だからこそ、選択に迷ったり悩んだりする姿が見られる。このような時期だからこそ、他の保護者の話を聞き、自分の気持ちを話すことで得られるものがあると信じ、初めての方が参加しやすいようなテーマ設定やイベントを企画していきたい。

（表４）

	令和５年度　ふわり　テーマ
４月	園や学校への伝え方のコツ
５月	フリートーク
６月	家族・きょうだいについて
７月	フリートーク
８月	（休み）
９月	フリートーク
10月	自分でできるよ！ ～身辺自立のための家での工夫～
11月	フリートーク
12月	おこづかいってどうしてる？ ～大切なお金の使い方～
１月	フリートーク
２月	新年度へ向けて役立つ情報交換！ ～入園・入学準備～
３月	フリートーク

（３）学び合い事業

当法人の学び合い事業には、次の３点のねらいがある。

① 保護者、会員の発達障害に関する理解を深め、協働療育を進める。

② 一般市民に発達障害の理解を深める。

③ 支援者（職員を含む）の専門性を高める。

１）セミナー等の開催

会員だけではなく、広く市民の方に向けて、自閉症・発達障害児者支援セミナーを ２回開催した。

令和５年自閉症・発達障害児者支援セミナー（表５）

	内容	参加人数
第一回	７月９日（日）　13：30～15：30 場所：仙台市シルバーセンター７階　第一研修室 「不安が希望にかわるとき ～息子と歩んできた 20 年～」 講師：橋口亜希子氏	５０名
第二回	１１月１９日（日）10：00～12：00 場所：仙台市シルバーセンター６階　第二研修室 「今だからこそ言える、父親と息子の話」 登壇者：伊東さん親子、上島さん、大野さん	３５名

今年度は、保護者から学ぶをテーマとしたところ、参加者も保護者が 87%を超えていた。特に第２回は「父と息子」だったこともあり、父親の参加者が多かった。

専門家目線の話ではなく、保護者としての話に「実体験に基づいているのでスッと入って来て、共感できた」など、保護者にとってはエンパワーメントできる内容だったことが伺える。

しかし、参加者は、例年のセミナーと比較して少なかった。その背景としては、保護者に視点を当てたことで、支援者や当事者の参加が少なかったことがあげられるだろう。また、オンラインセミナーの増加、無料視聴の動画配信に加え、第 5 類となっても、感染症が流行っていたことも要因にあると考える。

これからも、多くの方に「聞いてみたい」と思ってもらえるようなセミナーを開催していきたい。

2）職員研修

当法人の活動目的や活動内容を鑑み、職員研修は研鑽を積む場の一つとして位置づけ、次のような視点から実施している。

〇職員研修の学びから専門性の高い人材育成を図る。

〇法人組織を考えた視点を持ち、地域社会に向けてのアドボカシーできる人材育成を図る。

令和５年度　職員研修一覧（表 6）

専門研修	・7/9，11/19　学び合い事業のセミナー（2 回）を受講 ・12/10　プリズム勉強会を受講 ①　7/6　事例検討会Ⅰ ②　10/5　事例検討会Ⅱ ③　11/9　LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラムⅠ ④　12/7　LD・ADHD 等の心理的疑似体験プログラムⅡ ⑤　2/1　インシデントプロセス法による事例検討会 ⑥　3/7　「教えて真理先生」 ③～⑥　講師：梅田真理氏〔宮城学院女子大学　教育学部教授〕
職員研修	①　6/1　KABC-ⅡとSP 感覚プロファイル ②　6/30　虐待防止・身体拘束適正化研修Ⅰ ③　10/31 虐待防止・身体拘束適正化研修Ⅱ

情報発信事業

◯ 会報誌「すぽっと」について

会報誌は活動の様子、事業についての記事やセミナー・勉強会についてなど様々な内容を記事にし、隔月に発行することができた。今年度は、長年ご尽力いただいている理事の皆様の当法人や発達障害に対する思いを、会員をはじめ、多くの方々に知っていただくことをねらいとし、当法人の理事のインタビューを掲載した。これにより、会員にサポートネットを支えてくださっている方々を改めて知ってもらうことができた。そして、理事の皆様の当法人に対する思いを伺えたことは、職員にとっても大きな励みとなった。

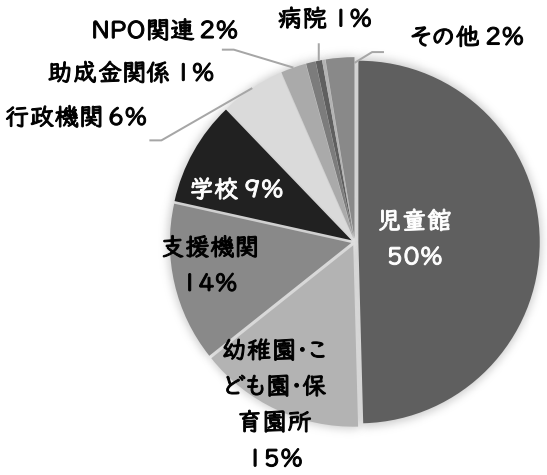
昨年度同様、会報誌は下図の送付先、約 240 か所に 370 通を送付している。さらに発達障害への理解やサポートネットの活動内容を広く知ってもらうため、関係機関のみならず、虹っ子を利用する保護者への配布も継続してきた。

令和６年度も隔月の発行を継続し、法人活動や保護者と子どもたちを応援してもらえるような会報誌を目指して活動していきたい。

【すぽっと送付先】

（団体）

図６



（個人）

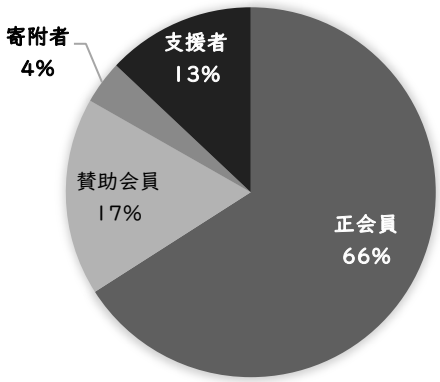



図７